事例報告

外部講師による「アクティブ・ラーニング型授業」の取り組み

～「保健体育科教育法Ⅳ」における実践より～

鈴木　康平[1)]，柿山　哲治[2)]

Approach of “active learning type class” by the outside lecturer

～ From practice in “Teaching methods of health and physical education IV” ～

Kohei SUZUKI[1)], Tetsuji KAKIYAMA[2)]

抄　録

2017 年度より 2019 年度までの 3 年間、外部講師の立場で、「福岡大学学士課程教育の一体的改革」の一環としての、「アクティブ・ラーニング型授業」を実践させていただいた。本学スポーツ科学部 3・4 年生を対象とした、「保健体育科教育法Ⅳ」において、学生の主体的な取り組みを踏まえつつ、より対話的な学びの場を目指した。ここに 3 年間の概要を提示し、その中から主に 2019 年度の授業における実践例を報告する。

学生が相互に自身の思いを意欲的に語る姿や意見交換は実に活発で、まさに「アクティブ・ラーニング型授業」にふさわしいものであった。学生が自らの教育実習体験や社会人経験を語ることで、参加者により積極的な姿勢と深い学びを生じさせた。授業者よりはむしろ学生からのアプローチによって授業の深まりを構築する突破口が生じたことに意義を実感できた。また、3 年生学生が自身の辛く苦しかった経験を素直に述べ、授業者の願いも受け止めて悔し涙を嬉し涙に変え、さらにこれからの自分を前進させていこうとする姿を披露した。

外部講師に求められる役割及び指導上の留意点を考慮しながら、通常の授業で習慣化されており、学生が自ら発信する「1 分間スピーチ」を最大限に活用して、授業者が用意する題材ではなく学生の発想からテーマを設定して深い学びに展開していく流れを大切にして臨んだ。前述したように、学生が自らそのきっかけを作ったために授業はスムーズに展開され、積極的な議論の場へと発展できた。また、通常の授業者の学生への願い（日頃、大切にされていること）を、授業のねらいや目指す姿に浸透させて状況に即したメッセージを発信することを重視した。本時が一過性のものに終始することなく、次時以降へと発展して日常に戻っていくことを願っての思いである。

学生の主体的・能動的な学習が推進される中で、近年の大学教育におけるアクティブ・ラーニングの重要性は増大の傾向にある。大学教員のアクティブ・ラーニングの授業力向上のためには、授業者は常に学生との対話的な学びの場を一層充実させることが不可欠であり、今回の実践報告がこれからの大学教育及び将来教師を目指す学生の一助になればと考えた。

1）東海学園大学
Tokaigakuen University
2）福岡大学
Fukuoka University

1. はじめに

近年、大学教員の基礎的な資質能力として授業力の向上が求められている。さらに、従来の講義型授業から学生の主体的な活動を取り込んでの授業が望まれる傾向も大きくなりつつあり、学生の活動を引き出すための授業における学生への指導上の配慮や創意工夫が不可欠な状況にあると言えよう。諸星は、アメリカでの大学教員時代に、「学術の研究はしていたが、自分がいかに教える方法、テクニック、学生の心を知らなかったかを思い知らされた」[1] と述べ、その後自身が多くの教育的技法を学ぶことによって授業力を向上させたとしている。研究さえしていれば良いと言われた時代から確実に大学は変容してきていると言えよう。換言すれば、小学校・中学校・高等学校の現場の教員のみならず、大学教員にも授業力の向上が要求され、同時に関心も高まってきている。

このような状況下で、アクティブ・ラーニングは学生の主体的協働的な学びの場として位置している。教員には授業力の向上に関して、当然のことながら学生の実態に応じたアクティブ・ラーニングの教育手法の充実が望まれる。2012年の中央教育審議会答申では、生涯学び続け主体的に考える力を育成する大学へと求めながら、大学教員に対しても、積極的な取組を促す仕組みを整備することを推進している。すなわち、新しい時代における教育の在り方について、大学にシラバスの導入がなされて計画や評価が明確化されたその上に、更なるステップアップの段階として、学生の対話的な学びを核とするアクティブ・ラーニングの充実を図ることは意義あることと考えられる。

中井は、「何を教えたかよりも、学生が何を学習したかが重視されるべき」[2] と学生の視野での必要性を述べ、どのように学ぶのかという学びの質や量に関して言及している。また、渡辺は、アクティブ・ラーニングに関する指導方法の充実について、NITS（独立行政法人職員支援機構）が各地で開催している「NITSカフェ」を紹介し、2015年度から現在までの実践例から、深い学びの視点からのカリキュラム・マネジメントを解説している[3]。このように、各所でアクティブ・ラーニングへの関心は徐々に高まってきており、多くの実践や研究が報告されている。

2017年度より2019年度までの3年間、本学が進めている「福岡大学学士課程教育の一体的改革」の一環として、「アクティブ・ラーニング型授業」を実施する教員を支援し、より多くの「アクティブ・ラーニング型授業」が展開される学内の雰囲気を醸成することを推進する中で、外部講師として特別講演の機会に恵まれた。「保健体育科教育法Ⅳ」において、授業提供者である柿山哲治先生（以下、柿山氏）の協力と指導を得て、将来教師を目指す3・4年生の学生と向き合う授業を実践し、その中で学生は実に積極的でまさにアクティブな姿勢を十分に披露した。そこで、本報告ではこの3年間を通して、学生と共にアクティブ・ラーニングを充実させるために外部講師にはいかなる指導法や授業の工夫が必要であるかを追求しながら行った授業の実際を提示することで、将来教師を目指す学生の意識の向上や取り組む姿勢を構築するための一助になればと考えた。同時に、自身を含めた大学教員が、「アクティブ・ラーニング型授業」に対して更なる自身の授業改善を図り、授業力向上への足がかりになることを望みながら、3年間の実践を概観する。

2. 3年間の取り組み

2017年度より2019年度までの3年間、本学スポーツ科学部・保健体育科教育法Ⅳを受講する3・4年生の学生を対象にして、「アクティブ・ラーニング授業」を実践した。そのプロフィールを表1に示した。

表 1. アクティブ・ラーニング型授業のプロフィール（2017 年度～2019 年度）

回	月日(人数)	主　題　名	主　た　る　本　時　の　ね　ら　い
1	2017.11.13（16 名）	保健体育教師を目指す皆さんへのメッセージ	教師の中にある、人の心と向き合うことが不可欠な職業のすばらしさを、純粋な思いで実感させ、より良い学生生活づくりに反映できるようにする。
2	2018.11.12（30 名）	中学校保健体育科教師に必要な授業つくり	スポーツ界の諸問題を教師として現場に生かす方途を整理し、話すのではなく「語る」ことの大切さを理解して実践できる自身の教師へのデザインを描けるようにする。
3	2019.11.11（30 名）	教師を目指す皆さんへのメッセージ	今日の厳しい現状の教育現場を認識する中で、自らが教師にチャレンジする意識を高め、目標の実現に向けて前進する姿勢を養う。

第1回2017年度の授業では、自身の25年間における中学校保健体育科教師の体験をベースとして組み立てた。近年、教師という仕事が実に厳しいものであり、教師を目指す学生にも不安を感じる者が増加傾向にある中で、生徒と共に喜び悲しみを共有した向こうにはかけがえのない宝物（地位や名誉、お金では絶対に得ることにできない何か）が存在することを強く訴えた。

第2回2018年度は、前年からスポーツ界に続出した道徳的・倫理的な諸問題を取り上げて、意見交流を行った。その中で、保健体育科教師として、発生したスポーツに関する課題やスポーツイベントを現場・生徒の指導に活用していく意味とその方途を身に付けることの願いを込めた。2年後に迫る2020年東京オリンピック地元開催を視野に入れての意味合いもあった。

第3回2019年度は、2017年度・2018年度に比べ、教師対学生の形ではなく、学生対学生に教師が加わっていくような相互のうねりを発生させ、互いに意見を交流する形式を重視して実施した。内容も事前に準備するのではなく、授業を進めつつ学生の意見の中から題材を発掘して発展させるスタイルに挑戦した。多難な目指す姿ではあったが、結果として、きわめてアクティブな学生の意見や姿勢が表出された。

これらの3回の実践で常に重視し、自身が考慮したことは、日常の授業者の思いや日頃から大切にされていることを、自身が授業にどのように活用し生かしていくかである。その実例を①～③に示した。

①１分間スピーチの活用
②「事前～事中～事後」の流れの重視
③「すなおは力」・日頃大切にしている学生への願いの構築

1分間スピーチは、学生のメッセージ性の向上のために、毎時間授業の導入部分で採用しているもので、様々な課題を学生に与えて実施している。授業展開に入っていくうえで大切な機会であり、学生の考えを反映して授業の構成を操作できる可能性もある。第3回の際には、学生のスピーチがきっかけとなりスムーズな形で課題に向かうことができた。

「事前～事中～事後」の流れに関しては、個人カード（授業単元計画や今週のトピックス、授業コメントが記されている）から、前時から引き継いで次時につなげていけるような連動性を考慮した。本時が点で終わらないように、「事前～事中～事後」の3つが線になるような姿を目指した。学

生にも将来的に教師として常に授業で配慮すべきことであることを理解させる思いもあった。

さらに、指導者が、「すなおは力」なる思いを学生への人としての指導としていることを、自身も言い聞かせて学生との意見交換に臨んだ。一度の90分間の限られた時間ではあるが、お互いによりすなおな気持ちになれることでアクティブな様相も深まると考えた。授業の内容のみならず、外部講師は、日常の授業者の願いや一人の人間としての目指す学生像を強く受け止めて、自身の実践をすることが不可欠であると思う。

3. 第3回2019年度の実践

3回の授業実践の中から、第3回2019年度に行った授業の詳細を示す。スポーツ科学部3・4年生の履修学生30人によるクラスにて、2019年11月11日（月）第4限の「保健体育科教育法Ⅳ」にて実施した。3年間の取り組みで前述したように、学生と教師の間において、お互いに自身の意見を述べつつ積極的な意見交流がなされアクティブな展開になった。その中から2つの場を取り上げ、1）2）に学生の様相とその実際を提示する。

1）　学生の経験や実演が教師の不可欠な資質に重なったとき、全体の場で披露することでよりアクティブな展開になる。

本授業では、2名の学生のスピーチが突破口となって発展し、教師に必要な要素が認められた。学生A（女子）、学生B（男子）の様相及び教師としての大切な事項を表2に示した。

Aは4年生でありこの段階で教育実習を終えていた。その体験から、学生の前に出て話をしさらに先生役を実演した。その中で学生の意見に耳を傾ける際のまなざしや受け応えに、余裕と相手の意見をじっくりと受け止める「間」が生まれていた。いわゆる「呼応の関係」である。今日の教育界で、教師生徒間に生じる課題の一つに教師の一方的な姿勢（生徒の立場からは、「先生私の気持ちをしっかり聞いてくれない」なる思い）があるが、これは呼応の関係が欠如していると言えるだろう。実際にAが学生の意見に必ずうなずき、「あなたの気持ちを私は受け止めましたよ」と繰り返す姿から学生の気持ちはほぐれ積極的な姿勢が生まれた。Aは耳で聞くというよりも、むしろ心で聴いていたと言える。

次に、Bは科目履修生であるが経歴がユニークで、警察官の経験があった。A同様に前に出て学生の質問に様々なやり取りをした。社会人経験があることから学生では経験できない話が多々出る中

表 2. 学生の様相と教師として大切な事項

学生名	学　生　の　様　相	教師として大切な事項
学生 A（女）	学生の質問や意見に対する姿勢が表情豊かで、必ず相手の言葉にうなずき、丁寧にかつ優しく答える。自身の夢や目標（どんな教師になりたいか、どんな学級を作りたいかなど）への問いに対して、実に楽しそうに嬉しそうに自身の思いを述べる。	「呼応の関係」
学生 B（男）	自身の社会人経験を学生とは異とする雰囲気で時に、厳しく、熱く、また冷静に、リアクションを入れながらメッセージを発信した。淡々と述べるのではなくめりはりをつけて、語っていた。実体験（警察官）に裏打ちされた重厚感のある姿である。	話すのではなく「語る」

で、Bは一つ一つのことを実にじっくりと心を込めて話した。話を聞いている学生を諭すような雰囲気が自然に醸し出され、しなやかな空気感に包まれた。Bは話すのではなく、「語って」いたと言える。これも現在の教師の課題の一つとして「一方的に話す先生」があげられる中、Bの姿は話すのではなく、「語る」ことのできるものであった。大学生としては、警察官という特殊な経験がAに与えた影響は大きいと考える。Bは、口で話すのではなく、心で語っていたのである。

2名の学生によって、「聞くのではなく、聴く」「話すのではなく、語る」、それぞれ示されたことは多大な収穫であった。

2）　悔し涙から嬉し涙に　～皆で共に口ずさんだ「贈る言葉」～

教師には喜びも悲しみも生徒と共有する心のありようが常に求められるが、学生C（3年女子）の姿を表3に示す。

Cは、教師の伝えたい思いを自身の辛く苦しい体験を素直に披露することで同時に、人として教師として生きていくために大切な何かを得たと言える。実際に、自身が抱えてきた複雑な家庭事情やまだ癒えていない心の内を、実にすなおに語った。当初は涙にくれていたが、授業間でのやり取りや雰囲気から次第に心が落ち着いてきた。教師が願いを込めて、「自分の悲しみや悔しさを、（大変だけど）他人への優しさに変えられる。そんな先生になってほしい」のメッセージに、Cは徐々に笑顔になり悔し涙が嬉し涙に変わっていった。教師は、「福岡県出身の武田鉄矢さんの歌にありますね、～人は悲しみが多いほど人には優しくできる～　その通りだと思います、皆さんそんな先生になってください」と歌詞（贈る言葉）のフレーズを学生への願いに重ねてメッセージした。

そして、皆で一緒に「贈る言葉」を口ずさむことができ、90分間の終了となった。Cが教師の言葉を引き出したとも言えるだろう。教師は、自身が何をしたか（成績や業績）よりも、何を遺したかが大切だと考える。皆で口ずさんだ歌（贈る言葉）に大切な何かを遺せたとの思いである。

4. まとめ

保健体育科教育法は、保健体育教員養成の要となる教科であり、保健体育の授業を行う上で欠かせない学習指導要領の内容理解はもちろん、学習指導案の作成、マイクロティーチングや模擬授業の実践といった演習形式の授業である。特に、保健体育科教育法Ⅳは、選択科目ではあるものの必修科目で積み上げられた保健体育科教育法Ⅰ～Ⅲの上に位置づけられている。つまり、保健体育科教育法Ⅳは履修しなくても、中学校および高等学校の保健体育教員免許取得の有無には影響しないため、「本気で保健体育教師を目指す者」が、受講している可能性が考えられる。

本学における「アクティブ・ラーニング型授

表 3. 学生の様相と人としての大切な事項

学生名	学　生　の　様　相	人として大切な事項
学生 C（女）	自身の辛い経験（家庭の複雑な事情など）を素直に語った。現在も全ては解決しておらず涙ながらの精一杯の語りであった。徐々に自身を落ち着かせながら、授業の最後には、悔し涙は嬉し涙に変わった。皆で、「～人は悲しみが多いほど、人には優しくできるのだから～」と口ずさむことができた	悲しみや悔しさを、他人への優しさに還元できる教師に

業」を実施する教員を支援する取り組みで、外部講師を招聘できる環境が整い、前任校時代から、教員養成について議論し、指南を受けてきた鈴木康平氏の教育観を是非学生に体感させたいという筆者の強い思いから招聘講演を依頼した。

鈴木氏の授業は、一瞬にしてそこに居合わせた学生の生徒観を見抜き、そしてその学生達を鈴木ワールドへと引き込む、学生の教師観を揺さぶる要素がみなぎっている。それは、鈴木氏が前任校から実践されていた全学生へのあいさつの率先、教室の隅々まで見渡せる眼差し、話の中で自然に取られる間、学生と呼応させるリアクション、教室中を縦横無尽に躍動し、魂に訴える歌声、その全てが学生の内なる声を引き出す力と化して行く。後列からこれまでの授業を参観して、学生が前のめりで鈴木ワールドに陶酔している様子が窺える。学生たちのいつもより大きな頷き、声が出るほどの笑い、次々と発せられる本音。これまでの自身の授業を振り返り、課題を押し付け、学生に仕方なくアクティブ・ラーニングのまねごとをさせていたのではないか？課題を確実にこなし、試験に合格した学生は単位を取得したが、単位以外に学生に何を与えることができたであろうか？終始自問自答に陥らざるを得ない。

第3回目の授業冒頭尾でもランダムに学生を示して、1分間スピーチを行わせた。通常だと指名された学生が与えられた時事問題について1分間で話し、それを聞いた学生から良かった点、改善点の評価を得て終わるところを、一人の女子学生のスピーチ後、鈴木氏の「語って下さい。」の一言と、鈴木氏が刺激するでもなく一つひとつ彼女と呼応し続けると、自分の心の奥底で押し殺してきた感情を一気に噴き出し、彼女の眼から涙が溢れ、感情を出し切った瞬間に笑顔に変わった。その一連の流れの中で、彼女の話は確かに語りに変わって行く様相をまじまじと見せつけられた。あれだけ泣きじゃくった学生も、授業が終わるとあたかも何もなかったようなスッキリした顔で、「ありがとうございました」と大きな声であいさつをして教室を出て行った。まさに限られた授業の中で、筋書きのないドラマを見せられたような光景であった。

3年間の取組を総括し、何を学生に遺したか？と問われれば、鈴木氏の授業を体験させることができたという一言に収まる。しかし、通常の授業では味わえない、その体験をした者ならではの何かを感じさせることができたのは確かだと思う。その何かを活かすも殺すも本人次第であるし、我々教師は学生の興味関心を刺激し続ける工夫を怠ってはならないと戒め、授業の中に当たり前に導入している内容の質の見直しだけでも、全く違う展開に繋がる可能性を筆者自身が体感できた授業であった。

5. 謝辞

本報告及び3年間の授業の実践において、その機会を与えてくださった福岡大学スポーツ科学部の皆様に心より感謝申し上げます。また授業提供者の柿山哲治先生には多大なご指導ご鞭撻をいただきました。感謝の意を表します。

6. 参考文献

1) 諸角裕. 消える大学・残る大学：4－5. 集英社. 2008.
2) 中井俊樹. アクティブ・ラーニング：3－5. 玉川大学出版部. 2015.
3) 渡辺研. アクティブ・ラーニングは大丈夫ですか. 教育ジャーナル58（9）：10－22. 2019.

資料 1
保健体育科教育法Ⅳ学習指導案

□日　時　平成 31 年 11 月 11 日（月）第 4 限
□場　所　第 2 記念館 2F　1222 教室
□クラス　福岡大学スポーツ科学部 3・4 年生 30 名
□授業者　鈴木康平　（指導者・柿山哲治）

1．主題名　「教師を目指す皆さんへのメッセージ」
～厳しい教育界の現状と向き合って、自分らしさを求めよう～
～スポーツの素晴らしさ（課題）をそれぞれ発信できる教師になろう～

2．指導の立場
（1）主題設定の理由
第 32 回オリンピック東京大会 2020 を来年に控えて、スポーツ界は様々な形で盛り上がってきている。ラグビーワールドカップ 2019 では、日本代表チーム初のベスト 8 の大活躍のみならず、東日本大震災からの復興を世界に発信した釜石での開催などスポーツの域を超えた大きな成果を示したと言える。しかしながら、東京オリンピック開催の 8 か月前に急遽、マラソンと競歩が札幌市に変更されるなど、開催地や運営者、そして何よりアスリートに多大な混乱を招く結果となるなど課題も山積する。
このように、スポーツの世界では大きな感動と共に、諸問題も生ずる。テコンドー連盟や相撲協会などはマネジメントの問題が信頼関係を失墜させている。日常的に起こりうるこれらの事象を、保健体育科教師として生徒たちにどう問いかけどんなメッセージをしていくかは大変重要であると考えた。
さらに、教育界に目を向けると、神戸市における教師間の常態化したいじめ問題や、岐阜市の中学生の自殺（担任教師の退職）といった社会問題に発展する事例がみられ、以前にも増して教師・生徒両者に厳しい状況が浮き彫りにされている。そこで今回は、保健体育科教師を目指している学生に、厳しい学校現場・教員世界の実情を理解しつつ、スポーツの持つ素晴らしさや課題を生徒たちにどのように示していくかその方途を考え、自分らしく教育実践に生かしてほしいとの願いから本主題を設定した。

（2）「福岡大学　アクティブ・ラーニング型授業制度」に関わって
福岡大学生は、積極的に質問や自身の思いを表出できる傾向にある。本学が推進している、アクティブ・ラーニング型授業に学生がより主体的な姿勢・雰囲気で臨める姿を目指す。柿山教授が平素重視している、「1 分間スピーチ」が学生の発信力に大きな成果を残していると捉えて、学生の豊かな創造性や自身に考えさせる場を意図的に設定して、授業の展開を学生の意見がうねりの場を構築していけるような形に発展させていきたい。同時に、学生が受け身にならず、自身が授業者（将来を見据えて、今は学生だが授業を実施する感覚）になっての位置付けを重視したい。

3．本時のねらい
・スポーツ界の諸事例からスポーツの持つ素晴らしさや課題となることを、保健体育科教師として、生徒に語ることができる。（スポーツ熱は、東京オリンピック開催を契機に更に高まっていくと予知して）

・厳しい現状の教育界を認識する中で、自らが教師にチャレンジする意識を高め、目標の達成に向け前進する姿勢を養う。

4．本時の展開

課程	教師のはたらきかけ	指導上の留意点・備考
導入	・挨拶、自己紹介 ・学生の「1 分間スピーチ」の実施	・何も持たず、授業者と学生の意見交換で展開させることを強調する。 ・できるだけ語らせる。
展開	①　「1 分間スピーチ」から、題材となりうるものにコメントし、話し合えるように発展 ②　スポーツ・教育界の成果・課題を提示 ・ラグビーワールドカップ ・東京オリンピック、マラソン・競歩の変更 ・日本テコンドー連盟の混乱 ・日本相撲協会の暴力の連鎖 ・福岡ソフトバンクホークスの圧倒的な強さ ・高校野球投手の投球数制限 ・教師間のいじめ問題 ・なくならない児童・生徒の自死問題 ③　学生からの質問（教師への不安や採用試験への備えなどどんなことでも多くの質問を受ける） ・教員採用試験への備え（面接の実施　など） ・教育現場は、ブラックか？ ④　学生主体の形態（アクティブ・ラーニング）の完成に	・対立軸を作りやすいような題材の発掘に注視する。（賛成と反対） ・ラグビーワールドカップの課題にも目を向けさせる。（イングランドの表彰式の態度、など） ・生徒対教師、生徒対生徒、教師対教師、様々な形を理解させる。 ・学生の率直な思い、特に不安視していることを引き出す配慮を重視する。 ・自身の体験から、教師のやりがいをわかりやすくメッセージできるような話を導入する。
終末	・「授業に対するコメント（100±10 字以内）」の記入 ・学生への感謝とアクティブ・ラーニングの評価 ・挨拶	・自己表出できたか？ ・明日からの学生生活充実の願いを込める。